

教科等研究会（小・中学校特別支援教育部会）

平成２８年度 研究活動のまとめ

1 研究テーマ

児童・生徒一人ひとりが輝く「分かる・できる」「楽しい」授業づくり
～一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～

2 研究経過

	期 日	場 所	授業者、内容等
第１回	５／２６	甲佐小	年間計画 (参加者 75名)
第２回	８／５ (半日)	甲佐小	講話「特別支援学校の教育について」 (参加者 69名) 松橋西支援学校 迫田 明彦 教諭 講話「教材・教具の工夫～子どもとともに学ぶ」 熊本市立託麻西小学校 今村 正作 教諭
第３回	１０／２５	蘇陽南小	蘇陽南小 檜林 るみ子教諭 算数「かたちであそぼう」 (参加者 52名)
第４回	１／２７	甲佐小	七滝中央小 北里 真理弥教諭 生活単元学習「お店やさんをしよう！」 (参加者 74名)

3 研究の概要

(1) 研究の内容

①研究テーマについて

今年度、特別支援教育部会では、「児童生徒一人ひとりが輝く『分かる・できる』『楽しい』授業づくり～一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～」というテーマで研究を進めた。

特別支援教育の完全実施から１０年目を迎えるが、児童・生徒の教育的ニーズはますます多様化し特別支援学級在籍児童・生徒の数も増加傾向にある。一人ひとりの子どもの実態に応じて教材・教具や支援方法を工夫して「分かる・できる」「楽しい」授業づくりを行うことこそ特別支援教育の根幹であるとする。また、学齢期の今、授業づくりを工夫し、一人ひとりの実態やニーズに応じた支援方法を模索していくことが児童・生徒の将来の自立へ向けての重要な第一歩となると考える。

そこで、平成２８年度においても、昨年同様、全体研究テーマをそのまま部会の研究テーマとし、サブテーマを「一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫」として、子どもたちの実態や特性から教育的ニーズをどのように捉え、そこからどのように授業をつくり上げていくかということに視点を当てて研究を進めていくこととした。

今年度の部会員は総勢 77 名。会員数が多いので、できるだけ会員のニーズに応えた研究会にするべく、地区理事を中心に研究会の充実・深化を図った。同時に、協議や情報交換の時間を工夫するなどして、それぞれの授業実践等を互いに紹介する機会を多く持つこととした。

②研究の実際

研究授業及び授業研究会を 2 回実施し、夏季休業中の 1 回については、半日研修として講師を招聘しての研修を実施した。

ア 第 2 回 半日研修 講師招聘による講話

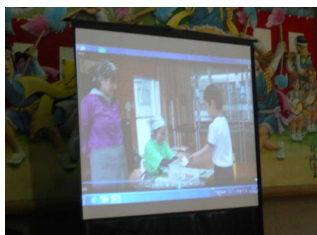
今年度は、震災のため例年行っていた施設見学ができなかったが、その分 2 名の先生に、会員の学びたい内容についてそれぞれ講話をして頂く半日研修を実施した。講話の内容については事前に会員にアンケートを行い、会員の悩みやニーズに応じた講話をお願いした。

前半は、迫田明彦教諭（松橋西支援学校）より、「特別支援学校の教育」について、支援学校の教育課程や実践内容を丁寧に話していただいた。後半は「教材・教具の工夫～子どもとともに学ぶ」という演題で今村正作先生（託麻西小学校）に子どもに合わせた教材教具作成の大切さ、ポイントについて分かりやすく教えていただいた。今村先生には自作教材やデジタル教材をたくさん会場に持ってきて頂き、会員はみな実際に教材に触れながら研修に参加できた。夏休みの研修であったので、各自研修の中身を自分が担任している児童・生徒と重ね合わせ 2 学期からの実践へとつなげることができた。

イ 第 3 回 研究授業及び授業研究会

蘇陽南小学校 檜林るみ子 教諭 （概要については、「4 実践事例」にて紹介）
ウ 第4回 研究授業及び授業研究会 七滝中央小学校 北里 真理弥 教諭

知的障がいと併せ持つ肢体不自由学級小学3年生1名に対しての生活単元学習「お店やさんをしよう！」の実践。交流学級の友達や教師を相手にクッキー屋さんをすることでコミュニケーション力を高めることを目的に授業を展開された。



お店やさんの様子



お客の感想カード

この実践も学習する様子を事前にDVDに納め、その映像を全員で視聴しながらの授業研究会となった。この研究会では、御船町を中心に計2回の事前研を行い司会や授業サポートなど町全体で授業を練り上げることができた。また、授業研究会では、児童生徒にコミュニケーション力をつけるための効果的な指導のあり方や教材教具の工夫について小グループで話し合った。支援学校のコーディネーターからも助言を頂き研究会がさらに深まった。

(2) 成果と課題

- 町単位で授業研究会を受け持ち、事前研の実施や司会、記録なども分担して授業者を支えるように組織化することで授業内容に深まりが見られ会員一人ひとりに力をつけることができた。
- 研究協議や情報交換の時間では、4人程度の少人数で具体的な実践例を出し合うことにより、児童・生徒の実態に応じた様々な支援方法について具体的に話し合うことができた。班別編成も障がい種別や学年で分けたり、経験豊富な先生にリーダーをお願いしたりして互いに悩みを相談できる場としたことで、活発な話し合いができた。
- 今年度も支援学校から研究会に参加いただいた。講師をお願いしたり、授業研の助言をお願いしたり、より専門的な立場からアドバイスを頂くことができた。第3回研修会では、県内支援学校の研究発表会の日程や特別支援学級の授業公開日などを一覧にして会員に周知した。
- 夏休みを利用した半日研修は、会員にも大変好評であった。事前アンケートから児童・生徒の実態に応じた教材づくりや支援学校の教育内容について学びたいという声があり、会員の希望に即した研修会を実施した。「自分でも教材を作りたい」「支援学校に見学に行きたい」という意欲的な声も多く聞かれた。来年はぜひ施設や支援学校等の見学も視野に入れて研修ができればと思う。
- 一昨年より授業研究会がDVD視聴での授業参観を取り入れているが、会員の声としてやはり生の授業を見たいという声もある。来年度以降の授業研の実施方法を考えていきたい。
- 今年度は小学校の授業研究会のみで中学校での授業研究会が実施できなかった。70名を超える大所帯の研究会のため、開催場所の選定、駐車場の確保等が難しく、児童生徒の障がいの状況などからも多人数での研究授業の実施が困難になってきている。
- 担任している児童・生徒の状況から学校を離れることが難しく、研究会への参加が難しい会員がいる。

4 実践事例

(1) 授業の概要

蘇陽南小学校の自閉症・情緒障がい児学級4年児童に対する算数の実践である。コンパスの使い方の習熟をねらいとして円をたくさん書き、こまを作って地域の老人会の方へ渡そうという実践である。
《授業の視点》

- ①児童が意欲的に取り組むようにするにはどうしたらよいか。
- ②児童に自信を持たせるためにはどうしたらよいか。

《授業者自評》

- ・基礎プリントは、国語と算数で5分程度でできるものをやっている。一人で読み、解いていくが、読み違ふことがあり支援をすることが多い。
- ・児童の実態から、○を4つ自分で見つけてなぞるようにした。
- ・コンパスは、くるりんパス（ユニバーサルデザインのコンパス）を準備したが、本人のものの

方が使いやすかった。

- ・3cmとしたのは、本児の書きやすさやコマの大きさを考えて設定した。
- ・予定では書いてしまってから、コマを作成だったが、児童の様子から気分を変えてみるために1つ色を塗ってコマを完成させた。
- ・半径などの形を考えてほしかったが、本児にとって難しかった。手立てが十分ではなかった。

《協議より》

- ・いつもの算数の授業の流れはどうか？一斉授業の中で行い状況をみて取り出しているのか？前もって学習したり、交流学級と一緒に学習し様子をみて個別に学習している。4年生と同じような授業をしているなら、評価をする必要がある。教科では、教科の目標がある。通知表や要録はそうすると評価、評価をつけないといけなと指導を受けた。評価のつながりが難しい。
- ・児童の実態について、手先の器用さに課題があるのか？コンパスの使用について特別に指導や支援をしたのか？何か教材教具を使ったのか？手先は基本的に器用な方である。指先の力、握力が弱い。くるりんパスは、入門期むけのもの。簡単であるがなれるまでに時間がかかる。それもあって、自分のコンパスを使うことになった。
- ・コンパスの使い方について、自分の経験上、グリップを回しておくとうかった。
- ・自閉・情緒の子どもたちは見通しを持たせないと難しい。円を描いて練習するとき、ゴールが見える手立てがあるとよい。
- ・手順書の扱い方について。机の上のシートに入れておける様にし本人も持っている。広いものは掲示して使っている。
- ・一人の授業の流れを作るのは難しいが、授業の形態の工夫があってよかった。
- ・授業の流れと評価を考えると児童に示すめあてとして「コンパスを上手に使ってコマを作ろう」とした方が児童も見通しを持てたのではないかな。
- ・コンパスの実際の指導の時、紙の下に段ボールを置いて針がぶれないようにする等工具を使った支援があると上手に使えるようになったのでは。

《まとめ 津森小 佐藤校長》

- ・「いつもの授業を大切にすること」が大事である。私たちもいつもの授業を振り返るいい機会となった。単純な作業でもいかに集中力を持続させていくかが重要。授業者と児童との信頼関係があると感じた。いい雰囲気で授業が進んだ。
- ・「分かる、できる授業」そのためには、児童の実態をつかんで授業をすることが大切になる。特に支援学級の子どもたちは学習の意欲が出ないと集中が続かない。そのためには、めあて、ゴール、課題の設定が重要。今日は最初に老人会へのプレゼントの話があった。めあては「コンパス名人になろう」だった。子どもにとって、意欲が出る言葉にした方がよい。
- ・導入の際にコマの実物、交流の写真など雰囲気作りがあるとよかった。
- ・視覚化がしっかりしてあり、スモールステップで進んでいた。
- ・体を使う活動も入れてあり、集中が持続していた。
- ・手順書を見て児童が進めていく授業がよかった。
- ・本時は、1対1なのでコンパスの指導、後ろからするとより伝えやすいのでは。尚かつ教師用のコンパスと一緒に操作すると体を通して実感として伝わる。次に生かしていくとよい。

(2) 学習指導案

4年算数 「かたちであそぼう！」 檜林 るみ子 教諭（蘇陽南小学校）

① 単元について

ア 単元について

3年時に初めて出会ったコンパス。しかし、指先だけを使うコンパスは児童にとって使いづらいものであった。個別学習を行い、たくさんの円や模様を描かせながらコンパスの使い方に慣れさせた。円を描くために半径や直径の関係を押さえたり、定規を使っての半径の取り方、描き始めの手首の回し方などが身につくように一つ一つ押さえながら描いていった。

4年生では1学期に平行四辺形やひし形の作図に使っている。ここでは、円を組み合わせたいろいろな形を描いたり円周を区切って長さを調べたりする活動を通して、コンパスの使い方に慣れ親しむとともに円を組み合わせた形の美しさやおもしろさを感じ取らせたい。

イ 本単元の支援にあたっては、次の点に留意したい。

- ・実際に形を描くときのコンパスの使い方のポイントを文字や絵で示しておき、読みながら作図に取り組むようにする。
- ・形をじっくり観察し、色鉛筆で円の弧をなぞり円周の続きを考えて円のイメージを作る

- ようにする。その後、円の中心や半径を捉えるようにする。
- ・円を描く時間をたくさん設定する。
 - ・児童が描いた円をひまわり教室や遊び道具（こま等）に利用するようにする。

② 単元の目標

コンパスを使っていろいろな形をかいたり、円周のおよその長さを調べたりする活動を通して、図形に親しみ、その楽しさを味わう。

③ 本時の学習

(1) 目標

○ 親指と人差し指を使ってスムーズにコンパスを動かし、円をたくさん描くことができる。

(2) 本時の展開

過程	時間	学習活動	主な発問と指示 (○) 予想される児童の反応 (◇) 教師の支援 (☆)	備考
つかむ	8	1 学習の流れを確かめる。 2 基礎プリントをする。 3 今日めあてを読む。	○今日は基礎プリントをして、その後コンパスを使った学習をします。がんばりましょう。 ○いつもの基礎プリントです。よく読んでしっかり答えを出しましょう。(5分間) ◇今日は簡単だな。 ☆時間を切りながら学習内容を変えることによって集中力を切らさないようにする。 ○この時間のめあてを読みましょう。	初任黒板 壁の紙ラベル 基礎プリント 1枚 タイマー
親指と人差し指を使って、コンパス名人になろう！				
見通す	10	4 プリントから円を見つけ、コンパスの使い方をおさらいしながら円を描く。	○始めにコンパスを使って円を描きます。どこに丸い円が見えますか。赤鉛筆でなぞりましょう。 ○コンパスの針をどこにさしますか。青鉛筆で印をつけましょう。 ○コンパスを使って円をたくさん描きましょう。 ◇簡単だよ。たくさん描くぞ。 ☆半径3 cm くらいの円が描きやすいし回しやすいのではないかなと思うので、そう指示する。 ☆コンパスの使い方について示した手順書を掲示し1つずつ進めながら描いていくようにする。	赤鉛筆 青鉛筆 コンパス 定規 プリント 工作用紙 手順書
1人で考える	15	5 コンパスで模様を描いてコマを作る。	○大野老人会との交流でコマを作ってあそぼうと思います。丸に模様をつけてコマを作りましょう。 ◇模様は何を描こうかな。おもしろそう。 ○コンパスでいろんな模様を描きましょう。半円を描いたり扇形を描いたりできるかな。コンパス名人を目指してがんばりましょう。 ☆コンパスを回す時の針と鉛筆の置き方を何度も練習し、手の感覚を身に付けるようにする。	コンパス 定規 工作用紙 色鉛筆 竹ひご
先生と考える	10	6 コマを仕上げて遊ぶ。	○上手になってきましたね。さあ、先生とコマを作って遊びましょう。 ◇がんばるぞ。 ☆担任も一緒に描いていき、競い合いながら楽しく作るようにする。	コンパス 色鉛筆
まとめる	2	7 今日の授業の振り返りをする。	2本の指を使ってコンパスをスムーズに回すことができる。【工作用紙、観察】 ○今日の学習が終わりました。めあてを振り返りましょう。コンパス名人になれましたか。 ☆自分の言葉で具体的に、どこがどうだったか発表するように促す。	